1997年(平成9年)5月1日 (木曜日) (日刊) 新潟日報

怖い子供の肥満

増える専門外来

県内

子供の肥満を治療する専門外来を設ける病院が県内で増えている。一九九二(平成四)年からの新潟大学付属病院などに続き、九六年には県立吉田病院と新潟南病院に相次いで開設された。糖尿病や脂肪肝など大人並みの合併症を持つ肥満の子供たちが増えたことから、治療に本腰が入れられるようになった。医師らは「思春期を過ぎてからの肥満解消は難しい。放っておけば生活習慣病の原因になりやすいので早い時期での治療が大切」といっている。

早く食習慣改善を

糖尿、脳梗塞などの恐れも

県内で小児科の肥満専門外来を設けている主な病院は三病院のほか、柏崎市の国立療養所新潟病院や長岡市の長岡中央総合病院、長岡赤十字病院など。専門外来は、いずれの病院も毎週一日か二日、特定の曜日の午前か午後に開設している。

また上越市の県立中央病院のように専門外来は設けなくても「小児科内分泌代謝外来に来る患者の七、八割が肥満児のため、治療する」という病院もある。

国立療養所新潟は新大病院と並び、九二年から専門外来を開設。県立吉田は九六年四月に従来から実施してきた肥満改善の集団指導を個人指導に切り替え、専門外来として力を入れる。新潟南は九六年十二月から「小児成人病外来」として肥満治療に乗り出した。

肥満児の増加について新大医学部小児科学教室の橋本尚士講師は「全国の小中学生の一割近くが肥満度一〇%以上の肥満だ。十年前の二倍、二十年前の三倍で、この傾向は新潟も同じ」と指摘。「肥満度三〇―五〇%以上の中等度肥満、五〇%以上の高度肥満の場合は糖尿病や脂肪肝、高脂血症などの異常が見つかりやすい。肥満を放っておけば将来、心筋梗塞(こうそく)や脳梗塞を引き起こしかねない」と注意を促す。

小児科での肥満治療について橋本講師は「思春期以降に、身に付いた食習慣を直そうとしても難しい。しかし太る原因となる食習慣が定着する前なら、肥満解消が健康的にできる」と意義を強調する。

小児科の治療はどこの病院も①摂取カロリーを絞らす食事療法②ジョギングなどを課す運動療法③生活指導―の三本柱が中心。高度肥満や合併症などがある場合は入院治療もある。

新大付属病院小児科の専門外来に昨年六月から通う中学男子生徒の母親は「体重七四キロ、肥満度八〇%余りで睡眠時に無呼吸の症状が出ていた。一カ月余りの入院の後、通院して現在は体重六〇キロまで減量できた」と話している。

国立療養所新潟病院で子供の肥満治療に当たる富沢修一副院長は「糖尿病など大人の病気が子供にも押し寄せている。『太ってどこが悪いのか』という親もいるが、『肥満は病気の根源』とまず親が目覚めてほしい」と呼び掛けている。

県内の病院で増えている子供の肥満治療専門外来での診察。右は新大付属病院の橋本尚士講師

新潟日報 (1997年5月1日)

新潟日報（1997年6月29日）

14歳の中3少年逮捕

神戸小6殺害 35日ぶり解決

「顔見知り」と供述

兵庫県警 自宅からナイフ

神戸市須磨区友が丘の土師(はじ)淳君(二一)=市立多井畑小六年=殺害事件で、兵庫県警捜査本部は二十八日、殺人、死体遺棄容疑で、現場近くに住む市立友が丘中三年の少年(一四)を逮捕した。少年は容疑を認めた上で「淳君とは顔見知りだった。(殺害は)殺意でなくてもよかった」などと供述。捜査本部は少年の自宅から、犯行に使われたとみられるナイフや犯行声明の封筒に張られたのと同じ赤いテープを押収した。

殺害後、切断した遺体にそでという犯罪史上まれにみる残虐な事件は、事件発生から三十六日目に解決へ向かった。

捜査本部は、動機などを追及。三月十六日の昼、現場近くで小学生の男の子二人が襲われ死傷した通り魔事件の現場で目撃された不審な若い男と似ているとの情報があり関連も調べる。

調べによると、少年は五月二十四日午後一時から三時ごろまでの間に、淳君の自宅近くの通称「タンク山」頂上にある有線テレビ施設付近で手で首を絞めて殺害した後、同施設内でのこぎりなどを使って遺体を切断。遺体を施設に隠し、頭部を友が丘中門前に置いた疑い。